

隅田川と深川の開発

江東区深川江戸資料館

古くから江戸・東京を代表する河川として知られる隅田川。隅田川と、その河口近くに位置する江東の町は、どのようなかかわりを持ちながら発展してきたのでしょうか。

27号から32号にわたって、隅田川と江東の町々、そこに住む人々の歴史や暮らしについてみていくことにします。江東の町を貫通して東西に走る人工の河川のほとんどは隅田川に通じ、沿岸の町でなくとも隅田川と切っても切れないかかわりを持っていることが江東地区の特色であるといえるのですが、今回の特集では、流域の町に限定してみていくことにしましょう。

隅 田 川

寛永6年(1629)以降の隅田川は、荒川の千住から下流の部分やさし、大川、浅草川、宮戸川などとも呼ばれます。さらに、明治43年(1910)に計画された荒川改修事業で、北区の岩淵から下流を隅田川と呼ぶことになりました。岩淵で隅田川から分かれて東京湾に注ぐ荒川放水路が新たに造られたのもこの時です。この両者の間にはさまれた江東区の西半分、隅田川流域に位置するのが深川です。

隅田川は、荒川水系・利根川水系をはじめとするたくさんの河川と連結し、舟運による広大な経済圏を形成して繁栄し、江戸へ流入する物資の集散地としての深川も特徴ある発展を遂げていきます。



隅田川テラス(常盤1-1)付近から新大橋をのぞむ

深川村の発祥の地

荒川放水路と隅田川を結び、江東区域を貫いて東西一直線に掘られた運河(ほとんど流れないのですが、現行の河川法では荒川放水路側を上流、隅田川側を下流と規定しています)の中で、深川の開発ととりわけ大きなかかわりを持つのが小名木川です。

徳川家康の入府にともなって、行徳から江戸へ塩を運ぶ目的で開削されたと伝えられる小名木川は、大体それ以前の海岸線だといわれています。海岸線に沿って掘り下げて運河を造り、その土で運河以南を埋立てるという手法で深川の地が造成されていく過程の最も初期に生まれたのが小名木川沿いの地域です。

北岸の森下1-3-17の深川神明宮が「深川村発祥の地」として史跡に登録されています。この場所は、深川村の開発者といわれている深川八郎右衛門が摂津国から来て、小屋を営み住みついた所と

されています。八郎右衛門は、この一帯を埋め立て造成したところ、徳川家康が鷹狩りのために訪れて地名を尋ねたがまだ地名がなく、家康の命により、八郎右衛門の名字を村名としたと伝えられています。そして、八郎右衛門が新田開発を行うことになったのが慶長元年（1596）のことといわれます。深川家は代々深川27か町の名主を務め、宝暦7年（1757）7代目で断絶したといえます。こうした伝承は、深川神明宮や泉養寺（深川八郎右衛門が開基で、現在は市川市へ移転しています）の由緒とも一致しています。

元禄の深川の情景

江戸の中心部から見て「川向こう」とよばれた隅田川以東の地域の開発は、さきに述べたように、小名木川の完成とともに慶長期（1596～1614）から始まり、明暦の大火後の万治3年（1660）に本所奉行が設置されて本格化していき、寛文期（1661～73）には多くの新田が成立しています。

地形的にみると、元禄の頃（1688～1703）には現在の深川の原型ができあがったといわれますが、その情景はどのようなものでしょうか。元禄の頃に深川に住んで、蕉風俳諧を確立した芭蕉の句を通してみましょう。

三日月や地は臙なる蕎麦畠

古池や蛙飛こむ水のおと

三日月のかすかな光にかすんで続く蕎麦畠や蛙が池に飛び込む音のほか何も聞こえない静寂がそれぞれ描写された俳句で、まだ静かな田園地帯であった深川の情景が浮かび上がってきます。しかし、いっぽう芭蕉が新大橋の架橋を喜んで

ありがたやいただいて踏む橋の霜

という句を詠んだのは元禄6年（1693）のことで、深川は江戸市中と結ばれ、都市化の速度を速めていくことになります。



高い護岸と芭蕉記念館分館（展望庭園）。川面の見える「隅田川テラス」は、この護岸の向こう側。



隅田川テラス案内板

深川の町場化と市場の形成

開発当初は新田であった深川村は、早い時期に町並地となっていく。明暦3年（1657）の大火以降、深川に多くの寺院が移転してきて小名木川南岸に寺町を形成します。その後、元禄検地を経て、正徳3年（1713）には慶長期の開発に始まる海辺大工町（清澄・白河・三好＝小名木川南岸）が、農村としての代官支配とともに町奉行の支配も受ける「町並地」となりました。このころから「江戸深川」という呼称もみられるようになります。

深川に町場が形成されると、江東地域は物資の貯蔵地として注目されるようになりました。深川は、江戸湾・隅田川・小名木川の結節点で、倉庫には適した土地であったためです。

年貢として集められた米を江戸へ送り換金するための拠点としての「蔵屋敷」を深川に持つ大名も現れてきます。すると、こうした武家屋敷に生活物資を供給するための市場が形成され、物資の流通はさらに活発化していきます。そして、いっそう都市化に拍車がかかっていくことになるのですが、その過渡期となったのは芭蕉が隅田川に面した深川芭蕉庵に住み、新大橋の架橋を句に詠んだ時期と重なっています。